

強く、広く、優しく。

PK/PD理論による耐性化抑制へのアプローチ!



VICTAS'S **ビクタス[®]S** の特長

I 広い抗菌スペクトラムと広い適応症

グラム陽性菌・陰性菌およびマイコプラズマの広範囲の菌種に強い抗菌力を示します。また、ビクタスSS錠は犬において4つの適応症を有しています。

II 抗生物質耐性菌にも有効

アンピシリン、テトラサイクリン、カナマイシンなどの抗生物質に対する耐性菌にも抗菌力を示します。

III 幼若犬(4ヵ月齢以上)にも使用可能

幼若犬(4ヵ月齢以上)の関節に異常所見を示さないため、幼若犬(4ヵ月齢以上)への使用が可能です。

IV 猫にも犬と同じ用量で使用可能

猫と犬における安全性試験及び臨床試験の結果から、猫にも犬と同じ最高用量(5.0mg/kg)で使用可能です。

V 腸内細菌叢に優しい

犬・猫の腸内細菌叢を構成する(偏性)嫌気性菌に対する抗菌力が比較的弱いため、腸内菌叢を乱しにくいと考えられます。

VI 投与しやすい製剤

錠剤はサイズが小さく、注射剤は注射量(0.1mL/体重1kg)が少ない。



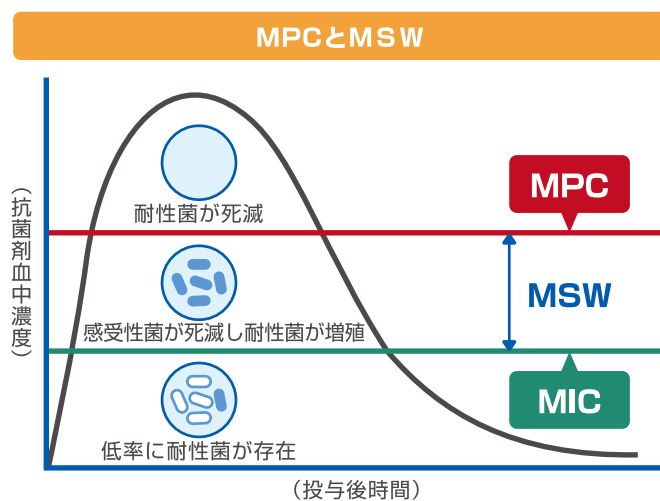
耐性菌をつくらないために

ビクタス[®]Sは、1回投与量を高用量*にすると耐性菌が出来にくいとされています！

MSW理論 (MSW: Mutant Selection Window: 耐性菌選択濃度域)

フルオロキノロン製剤には、耐性菌出現阻止濃度(MPC)と呼ばれる濃度が存在し、MPC以下では、耐性菌の選択・増殖がおきやすいと考えられ、中途半端な投与量で治療すると、耐性菌を選択することになります。このため、投与する場合は**可能な限り高用量*を用い、MPCを超える濃度**になることが望ましく、この高用量*による投与は耐性菌の発生リスク低減をもたらします。

*: 定められた用量範囲における上限に近い用量。

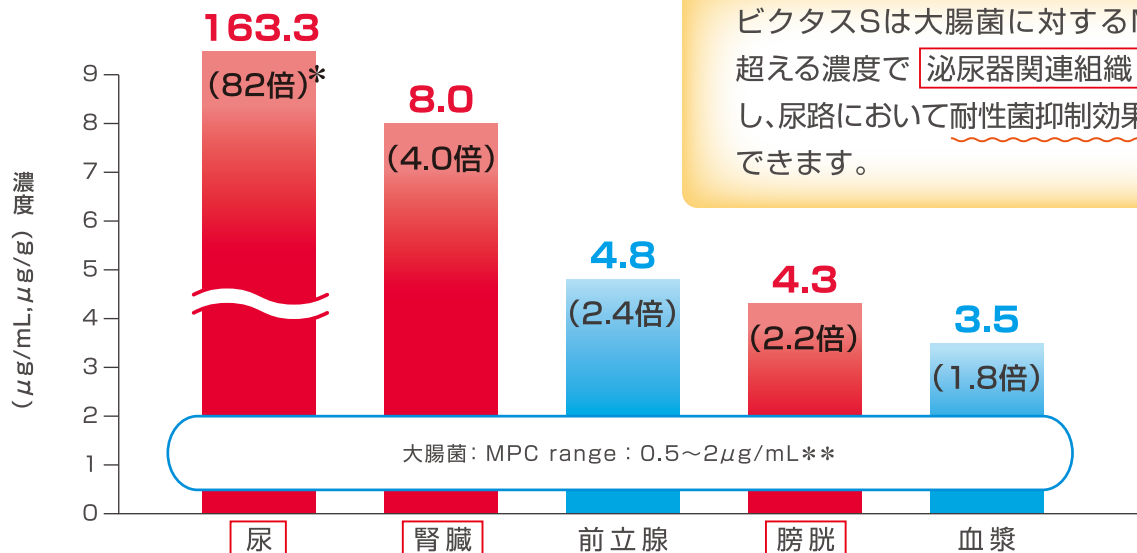


MPC: Mutant Prevention Concentration 耐性菌出現阻止濃度
MIC: Minimum Inhibitory Concentration 最小発育阻止濃度

ビクタス[®]Sの組織中濃度 (犬: 5mg/kg 1回投与2時間後)

ビクタスSは、5mg/kgに近い投与量が耐性菌対策に有効です。

ビクタスSは大腸菌に対するMPCを超える濃度で泌尿器関連組織に移行し、尿路において耐性菌抑制効果が期待できます。



*: 濃度がMPCの何倍かを示した。

** Shimizu et al. Acta Veterinaria Scandinavica 2013,55;37

(出典: ビクタスS錠 申請資料)

1844AH
HAB